第十六章　方言誌論

方言誌は方言研究の素材である。その良否は方言研究の成果を左右する、その上、比較研究にたづさはる人は少なく、方言誌を作る人は多い。從ッて、方言誌論は多數の關心の題目である。今こゝに之を問題にする事は無意味で無いと信ずる。

先づ、今日の方言學はかなりの程度に進歩して、明治時代に「風俗畫報」に掲載された程度のものは最早顧みられなくなッたと言ふ事を知ッてもらひたい。もッとも、今後六七十年もたてば、あれは百年前の方言資料として、新たに歴史的價値を生ずる事になる。しかし、今の所、あれは歴史的に取扱ふには新し過ぎ、さりとて現在の方言資料としては語彙が少な過ぎる。どッち附かずのものである。今日方言誌の數は、單行本だけでも三百冊を越え、雜誌や郡誌に載ッたものまで加へたら、千種にも上るだらう。私のカードに取ッたのだけでも五百種ある。今日では、一冊も方言誌（單行本）の無い縣は一縣もない。大抵、一縣につき六七冊ある。今新たに方言誌を作ッて、先輩の方言誌に洩れた新發見の語彙を學界に報告しようといふには一大決心と周到な調査とが必要である。學問にも、やはり、收獲漸減の法則が働いて居る。植物學の方では、新種には一々發見者の名を附記する例である

が、日本の植物には、マキシモキッチやツンベルグの名の附いたもの〻多い事驚くほどである。これは、M氏、T氏は、日本に歐洲風の植物學の興らなかッた時代に早く來朝して、各地を歩廻ッたからで、その頃は一足ごとに新種の發見があッたのである。所が、今日では植物學者の居ない縣（郡と言ッてもよい）は無い。今日、新種を發見しようとするには、前人未踏の山岳によぢ登るか、前人の洩らした所を拾ふかする外には仕方がない。專門家が歩いた跡を、素人が大股に歩いて、何か新發見をしようなどは蟲がよ過ぎる。春の野に出て〻摘んだ若草を植物學者の標本室に持込む樣な事をしてはならない。方言學の進歩は、植物學とは比較にならないけれども、それでも、通りすがりの旅人の物好きな採集を珍重するほど資料に乏しくはない。豐富な收獲を期待するならばやはり、前人の手の着けない處女地に遠征する必要があると思ふ。一番困るのは、先輩の著書から剽竊して來る事である。たとへば、甲斐の北巨摩郡誌（大正四年）は、東八代郡誌（大正三年）の方言部から五語を除き、三十四語を補ッただけである。誤植まで、そッくり其儘移されて居る。新たに、方言誌を編む人は、先輩の著書からは一語も採らぬといふ決意を示してもらひたい。

方言誌には色々ある。明治時代には、教育會が主となり、全縣から集めて編纂したので、その目的は矯正にあッた。然るに、昭和時代のは、主として、個人が、その故郷又は任地のものを集めたので、その目的は研究にある。著者・地域・目的に於ける右の相違は、外觀內容ともに、甚しく違ッた感じを與へる。明治時代のは活版ずり、大字のもの多く、昭和時代のは謄寫版ずり、細字の物が多い。また明治のは平がな書が多く、昭和のは片かな書が多いといふ風に、細かい點まで違ッてゐる。だから、近頃の人は近頃の方言誌を見て、「方言誌とはこんな物」と早合點してはいけない。それとは全く違ッた行き方もあるといふ事を知らなければならない。

方言誌は利用者を豫想して居る以上、利用者の希望を聞いてもらひたい。第一、方言誌は信頼できるものでなければならない。個人が自分の生れ故郷の方言を集めて、之を自ら謄寫版で摺ッたものは一番信用ができる。印刷を他人に頼めば、そこに誤植の虞が生ずる。教育會などで、多くの報告を整理したものは整理者に方言の知識が乏しいと、讀み誤りの危險もある。殊に、片カナを平ガナに直したり、平ガナを片カナに直したりすると、字の形が全く違ッて來るから、誤を看破るのは容易でない。たとへば、「茨城縣方言集覽」に牡馬（牝馬？）の方言「ぞーやり」とあるが、これはゾーヤク（雜役）のクをリと見誤り、さて之を平假名に直したのである。全縣的の方言誌には、この種の誤はあり勝ちである。だから、我々は、個人の町村單位の方言誌の方を信用する。一般に、町村單位の方言誌は狹くて深く、縣單位の方言誌は廣くて淺い。どちらも一長一短ある。自然にまかせて置けば、

各郡から方言誌の出揃ふのは何時になるか判らない。だから、師範學校などで全縣的調査をする事は歡迎すべきである。近頃はあまり無いが、明治時代のには地名を明記しないものがある。たとへば「靜岡縣方言辭典」などは、あんな大きな縣でありながら、駿河・遠江・伊豆の區別すらない（もツとも原稿には郡名まであッたさうである。印刷の際省いた）。こんなのは困る。特に、靜岡縣は、東西方言の接觸地帶だから、精査を要するのに、不本意な事をしたものである。近頃の方言誌の樣に、極度に地名を詳記し、ために地名辭典の觀を呈したのも困る。少しは、見る人の煩をも察してもらひたい。分布調査を目的とするのでない以上、郡名程度で澤山である。地名を現はすに、番號を以てする人がある。あれは困る。數字は個性の全く無いものだから記憶が困難である。一々、地名と番號とを引合はせて見なくては判らない。略語の使用は差支ないが、番號だけは止して貰ひたい。

次に、方言を記す文字には、萬國音標文字と平假名と片假名とある。ローマ字は、假名と併用した人は二三人あるが、單獨にローマ字だけを使ッた方言誌は一册も無い。たゞ、ローマ字雜誌に報告するといふ樣な特殊の場合だけは別である。萬國音標文字は最も理想的ではあるが、これは使用者に音聲學の知識が十分ある場合に限り許される。さうでないと、これは子供に剃刀を與へた樣なもので、人をも身をも傷ける虞がある。萬國音標文字を使用するだけなら大して難しくはない。難しいのは、最初、地方音の音價を測定して、適當の文字を選ぶ事である。たとへば、aかɑかを誤なく決定する事は素人には不可能と言ッてよい。東北地方には、小倉博士や金田一博士の樣な信頼できる言語學者が出て、早く、萬國音標文字の模範を示してくれたので、之に追隨する人が多くなッた。然るに、東北以外には小倉博士も金田一博士も無いので、萬國音標文字を方言に應用した人は極めて少ない。今日、方言を記す文字としては假名、特に片假名が一番廣く用ゐられてゐる。しかし、片カナは字體の似たものが非常に多く、誤讀・誤植の機會が多いので、平ガナの方がまさッて居る。事實、明治時代には平ガナの方が多かッたのである。地方獨特の音を表はすのは難事である。これは銘々が工夫すべきである。しかし、折角新規に工夫しても、活字の無いのは困る。この點に於て騰寫版はまさッて居る。音韻現象を說明する場合には、音の表記法には細心の注意を拂はなければならない。しかし、文法の說明が主である樣な場合には、音の表記法は、音韻現象の場合ほど嚴密でなくともよい。所々、漢字を用ゐたり、歷史的假名づかひに從ッたりしても、主意を傷けない限り、差支へない。それは、「萬葉集」の歌を引く場合に、讀み易いため、假名混りに書改め、たゞ肝腎の所だけ原文のまゝ引くのと同じ筆法である。

語彙の配列法には、部類分けと、アイウ順と、イロハ順とある。ABC順は未だ見た事が無い。部

類分けは最も困難である。品詞の分類が第一に困難であるし、名詞を更に天地部、動物部、植物部に分けるのが面倒である。この面倒を忍ぶよりは、むしろ、方言のアイウ順とし、之に標準語からの索引を附ける方が自他ともに便宜である。索引の作製も亦面倒ではあるが、しかし、これは方言誌に限ッた事ではない。學問的な著述には、すべて、索引が必要なのであッて、これを缺くものは良心的な著述とは言ひ難い。古くは、イロハ順の方言誌が多かッたが、近頃は殆ど見ない。

近頃の樣に、方言誌の數が多くなると、語彙の多いもの、その珍しいものでないと、人から珍重されない樣になる。中には、語彙を多く見せかけるために、標準語と同じものまで加へたものがあるが、こんなのは困る。酒は、水を割れば割る程ますく品位が下がる。こんな水ッぽい酒に醉ふ程、方言學者は下戸ではない。私が一番感心したのは、内田武志さんの「靜岡縣方言辭典」に洩れた言葉だけを集めたもので　第一頁から最終の頁まで新發見の語に滿ちてゐる。その内容は、漁業語彙・農業語彙・山林語彙・土俗語彙・星の名等である。同氏は靜岡縣人ではなく、秋田縣人であるが、土俗學者であるため、この異數の成功を收めたのだらう。方言の採集に取ッて必要なものは、土俗學の知識よりも、むしろ、土俗學の技術である。土俗の採集は、方言の採集よりも一段と難しいものである。この難しい採集によッて、技術を磨いて置けば、方言の採集はわけはない。方言採集家の最大の缺點は、あまり主觀的な事である。自分の頭の中から引出すだけで、人から聞く事をしない。しかし、一人の知ッて居る分量は千語どまりなのだから、かくして作られた方言集も千語を出るものは稀である。普通の方言誌に缺けて居るものは、漁業語彙・農業語彙・山林語彙・土俗語彙・星の名・風の名等である。東條さんの「方言手帖」は、知らぬ土地へ行ッて、他鄕人が採集する場合には便利なものであるが、土地の人が土地の言葉を採集するのに、あれに記入したゞけで、能事終れりとするのは困る。あれは、言はゞ旅人の採集法である。土地の人なら、もッと多くの事を知ッて居るはずである。「問はれただけしか答へない」といふ主義では、あまりに冷淡である。問はれなくても、知ッて居るだけは、氣がつくまゝに、進んで報告する樣にしてもらひたい。これは土着の人の權利でもあり、義務でもある。

× × ×

以上は、主として、町村單位の方言誌について述べたのであるが、以下は分布調査について述べる。分布調査にも色々ある。まづ地域から言へば、全國的のもの、數縣的のもの、一縣的のもの、一國的のものとある。對象から言へば、單語あり、文法あり、アクセントありである。調査の方法から言へ

ば臨地採集・通信採集・文獻採集の別がある。これらを數學的に組合せると數十通りある理窟であるが、しかし、實例を見ると五六通りしかない。たとへば、柳田先生や私の單語の全國的分布調査は文獻採集であり、佐藤清明氏の生物方言の全國的分布調査は通信採集であり、永田吉太郎氏の文法の全國的分布調査は通信と文獻の兩方を利用したものである。全國的調査に臨地採集法を採ッた人はフランスにはあるが、日本には無い。日本には市町村の數が一萬一千七百二十三ある。これを一日一個町村づゝ歩いたとしても、三十二年一個月かゝる。一郡一個所づゝ選んで毎日採集したとしても二年近くかゝる。まして、後者の場合は、一村から他村へ行くために空費される時間をも勘定に入れなければならない。全國的分布調査には、臨地採集は勞多くして、效の少ない事が判るだらう。たゞし、音聲學的調査は臨地採集によらなければ信賴できる資料を得る事が出來ない。凡ての話し手に音聲學の知識を要求する事が出來ないからである。服部四郎氏のアクセント調査が通信法を棄てゝ、文獻と聽覺的調査に依ッたのは正しいやり方であッた。

全國的調査は、右にあげた數氏以外には殆ど無く、他は多くは一縣又は一國を範圍とするものである。その方法は多くは學校の生徒を利用するものであッて、しかも耳によらずに目による採集であるから、廣義の通信法である。師範學校は、縣下の子弟を網羅してゐるから、分布調査には最も都合がよい。事實、方言に關する大著は、師範學校又はその教諭の手に成るものが多い。一縣の方言分布を調べる上に於て、師範學校の教諭は最も惠まれた地位にあるものと言へよう。しかし、それは分布調査に限る事であッて、町村單位の普通の方言集を作る助手としては、師範の生徒は必ずしも適任者であるとは言へない。生活の經驗淺く、語彙乏しく、課された宿題を果すのが何倒眞さに、郡誌や町村誌から方言の部を書拔いて來て、我が物顏に差出す樣なのが多い。師範學校で方言誌を作るならば、少なくとも半分は分布調査に當てゝもらひたい。こゝで問題になるのは調査すべき言葉の選び方である。方言量の多いのを喜ぶあまり、動植物方言や遊戯方言ばかり集めて、メダカの方言が一縣で六十語あるとか、チン〳〵モガ〳〵の方言が四十語あるとか言ッて、その多きを誇るのは近頃の弊風である。分布調査の目的は、交通史と交通地理の闡明にあるべきはずである。從ッて、交通關係を明かにするに適する言葉を選んで、その分布を調査するがよい。方言量の多寡は問題でない。むしろ、動植物方言や遊戯方言は、標準語を知らぬ子供などが自分で興味本位に命名したものが多いから、交通關係を明かにする目的には協はぬものが多い。

× × ×

師範學校の方言調査の模範として、島根縣女子師範學校の「島根縣に於ける方言の分布」をあげた

い。これは菊判三百三十八頁の大著であるが、内容は分布調査とその説明と普通の方言集との三部より成る。分布調査は、氷柱・綿雪・虹その他合計二百の標語を選んで、その縣内に於ける方言を問うたのである。標語の選び方は、名詞・用言・文法の全範圍に亘り、巧に選ばれてゐる。本書の成功の一半は標語の選び方にあッたと言ッてよい。しかし、唯一つ遺憾がある。それは、責任者石田春昭さんが石見雲城村の人であッたため、雲城村方言の分布を調べるために、過分の精力を注いだ事である。これは雲城人ならぬ我々には、どうでもよい事であッた。それよりも出雲方言の分布を調べてもらひたかッた。出雲方言は内地に於て孤立したもので、この所屬は疑問とされて居る。これに反して、石見方言は明に山陽道方言區に屬し、疑問は無い。本書の成功の他の一半は、その嶄新な編纂法にある。分布地圖を作れば、印刷に手數と費用がかゝる。さりとて、單に郡名を記しただけでは、細かい勢力關係が判らない。數字では印象が薄い。そこで、一二三五等の數字に代へるに、**一丁下正**等の活字を以てし、直觀的に勢力關係が判る樣に工夫した。この工夫は豫想以上の效果を收めて居る樣に思ふ。同氏は別に統計法を利用して居る。出雲飯石郡は、北部の諸村は出雲方言を使ひ、南部の諸村は石見方言を使ふと言はれてゐる。しかし、これを科學的に證明した人は無かッた。然るに、石田さんは、二十七語を選んで比較した結果、次の統計を得たのである。

石見系	調査語數	百分比
一宮	〇、〇	二六　〇
鍋山	一、〇	二二　四
東須佐	二、五	二二　一一
西須佐	四、〇	二一　一九
中野	三、〇	二四　一二
掛合	六、九	二七　二四
吉田	三、〇	二六　一一
波多	七、五	二七　二七
頓原	二二、五	二七　八三
來島	二五、〇	二七　九二
赤名	二五、五	二七　九四
志々	二四、〇	二七　八八

〇、五といふハシタの生じた理由は、同一の村で、出雲系と石見系とを併用して居る場合〇、五として

計算したからである。右によッて、次の結論を得る事が出來た。「出雲飯石郡の南部四個村の方言は平均九十パーセント石見系である。出雲方言と石見方言との境界線は、出雲飯石郡頓原村の吹ヶ峠にある」と。これは東條さんの「國語の方言區劃」にも見えない新發見の事實である。もッとも、あの地方の人々は薄々氣が附いては居たらうけれども、それを統計的に證明したのは石田さんの手柄である。石田さんの今一つの手柄は、隱岐方言は石見方言系であるとの東條説に反對して、むしろ出雲方言系である事を明にした點にある。即ち、出雲系三十語（八十六パーセント）に對して、石見系は僅に五語（十四パーセント）に過ぎない。

石田さんの採ッた方法は色々の教訓を含んでゐる。言語地理學的調査に、分布地圖の必要な事は東條さんのしば〳〵說く所であるが、しかし、今までに出版された方言分布地圖は極めて僅である。折角作ッても印刷に困る。そこで、印刷の際全然省くか、或ひは見本的に僅か二三枚を卷頭に飾る程度である。謄寫版でも色刷りとなると、やはり困難は同じ事である。先輩の失敗の跡を顧みるならば、私は、後輩に向ッて「分布地圖を作れ」と勸める氣には成れない。むしろ、地圖よりも、表や統計やグラフこそ、大いに利用せらるべきものだらう。地圖一枚を作る勞があれば、表十枚を作る事が出來る。表から統計へ、統計からグラフへと、一層高次に立體的に進んで行く事ができる。統計やグラフは、それ自身結論である。これに反して、地圖はあくまでも平面的の事實で、それを何枚重ねても、そこから結論を引出す事は容易でない。次に、「島根縣に於ける方言の分布」から一例を引いてみよう。

菓子	隱岐	能義	松江	八束	大原	仁多	簸川	飯石	安濃	邇摩	邑智	那賀	美濃	鹿足
カシ	下			一				一	一	止	正正正正	正正正正	正正正下	正止
クヮシ	正一	正正T	下	正正正T	正T	正止	正正正正	正正一	正正	正T	T			

即ち、クヮシの分布は、隱岐六語、出雲七十八語、北石見十九語、南石見ゼロである事が判る。割合を見ると、隱岐六割六分、出雲九割八分、北石見二割二分、南石見ゼロとなり、出雲に於てはクヮシは壓倒的に優勢である。こんな面倒な計算をしなくても、右の表を見れば、直觀的に判り、非常に印象的である。地圖に書現した所で、これほど印象的には出來まいと思ふ。しかも、勞力と時間と費用と紙幅と、凡てに於て、表の方が經濟的である。

×　×　×

最後に、何を調査すべきかを考へてみる。これには二つの回答がある。第一は、音韻・語法・單語のあらゆる分野に亘り、まんべんなくやれである。第二は、その地方に於て、前人の手を着けない部門を選んでやれである。もし、その地方が處女地であるならば第一の態度を採るべく、もし又その地方が十分開拓された土地であるならば第二の態度を採るべきである。方言學が現在その土地に向ツて何を要求して居るかを察すべきである。たゞ、自分の興味に驅られて、あまり偏ツた方面ばかり研究してはいけない。褒められる事よりも、むしろ、感謝される事を心掛けるがよい。感謝は、常に利他的行爲に對して捧げられる。方言の研究にも、利己的と利他的の別は確にある。自分の興味や好奇心のまゝに振舞ふのは利己的であり、自分の好き嫌ひを無視して、研究の輕重・先後を商量して、學界の要求に應ずる樣に振舞ふのは利他的である。學界が何を要求して居るかは、地方ごとに違ふので、一概に言ふ事は出來ない。北海道の樣に一冊も方言誌の無い地方に對しては、普通の方言誌を要求して居る。東北地方の樣に、方言誌はかなり有るが、分布調査の殆ど無い地方には分布調査を要求して居る。一般に、一番おくれて居るのは音質の分布調査である。これは通信法を利用する事が出來ず、一人々々に逢ツて、耳から聽かなければならないので、最も困難な性質のものである。たゞ、訛音だけは、通信法が利用できるので、調査も相當にある。しかし、訛音は音韻よりも、むしろ、語彙の問題であると思ふ。私が知りたいと思ふ事は、先づ、シェ音の分布、クヮ音の分布、ヒ音の分布、鼻音の分布、フェ音の分布等である。この程度の事なら、通信法もきくではないかと思ふ。